



電話は医学部の先輩、尾形悦郎東京大学教授(故人)から。「教授に空きが出て、候補として君を推すから帰ってきてくれ」という話だった。

そんなことがあるとは思っていませんでしたから、驚きました。UCLAの仲間と話したら、母校からのオファーだから断らない方がいいと言われ、私も日本に帰ることになるのかなと思いました。

ところが、教授会の選考でもめ決定が半年延びた揚げ句、別の候補者に決まりました。同僚からは「ウエルカム・アゲイン」と冷やかされましたが、そんなにがっかりはしませんでした。

しばらくして、尾形先生が突然ロサンゼルスに現れました。「東大医学部にはあなたみたいな人が必要だ。教授じゃ無理だけど助教



東海大学医学部の学生たちと(後列右から4人目)

先輩が東大復帰勧誘、情熱感じ帰国決心

米国式講義を实践、「教育は恩返し」実感

変革に熱心な東海大に請われ医学部長に

いにも心を動かされました。UCLAの医学部長に相談したら、「行って嫌だったら2、3年で帰って来ればいいんだよ」と言われました。家内や子供たちには迷惑だったかもしれないが、受けることにしました。

1983年、第四内科助教となり、14年ぶりの日本の生活が始まった。東大の学生はとても優秀で

授ならんとかなるから、我慢して私のところに来てくれないか」と口説かれたのです。

私は大学の研究室に案内し、プール付きの家に泊まってもらいました。尾形先生は「瞬」や「ぱりだめだよ」と諦めかけましたが、意志は固く「うんと言っただけで帰らない」とおっしゃる。仲が良かったのもありますが、とても立派な方で東大を変えたいという熱い思

た。でも、そのまま大学にいて医師試験に合格し、10年くらいたつと研究ばかりしているという進路には満足していないようでした。私は英米の友人を連れてきて、米国式の教育や臨床講義をバンバンやりました。すると、これは面白いと言って集まってくる学生も出てきました。

日本の臨床講義は教授が白衣を着て厳かに登場し、お連れの助手

が黒板をきれいにするというのが定番です。私は白衣も着ないで1人でマグカップを持って現れたので、学生からは「衝撃的だった」とずいぶん言われました。

学生に世界を見せてあげたいと思ひ、知り合いの米ハーバード大学医学部長と相談して、3年間の交流プログラムを立ち上げたこともありました。ハーバードから2人の先生と8人の学生を呼び、東大からは8人の学生が参加し、1週間、ともに「ニューパスウェイ」と呼ばれる少人数グループ学習を体験してもらったのです。

このほかにもいろいろ具体的な提案をしたのですが、教授会で総論賛成なのにいざ各論になるとでさなない。教授が将来、学生を自分のところに囲い込むために、外に出したがるんですね。

私は「学生が自分で何をしたいかを考えさせることが大事。そのためには多様な選択肢を見せることが必要」と何度も訴えました。

そんなやり取りを繰り返している時、はたと気がついたのです。自分がペンシルベニア大学で最初に教わった教授と同じことをしよう

としていくことに。私がいろんなハンディキャップを背負いながらも米国でやってこられたのは、自分で考え、もがいていると大学の枠を超えてさまざまな人が教えてくれて、助けてくれたからです。他流試合を通じて広くフェアな評価をしてくれる。そんな環境を日本にもつくりたいと願いました。それが、私が米国で受けた素晴らしい教育への恩返しであり、若い人たちに一番大切なことだと直感しました。

89年、医学部第一内科の教授となり、60歳の定年を迎える直前の96年、突然東海大学の医学部長に転身する。

当時、情報の世界的な広がりやバイオテクノロジーの進化が目覚ましく、米国や欧州で医学教育が変革しつつありました。日本では、頭では理解しているのに変われない。そんなとき、東海大学から「医学部長になって変革に力を貸してほしい」と打診があったのです。

松前達郎総長のもとで東海大医学部が変革に熱心なことは知っていました。1週間考え、「お受けします」と返事をしました。

東大で定年を迎えていれば、どこかの国立病院の院長の話があったかもしれませんが、柄ではありませぬ。やりたいのは「教育」と思っていたので、とてもありがたいオファーでした。

(聞き手は編集委員 山田康昭)

「出る杭」が日本を変える ④